

“出直す”

高松 文三

“何故、首藤先生は人気があるのですか。”と、このジャーナルの主幹である水谷さんに尋いたことがある。即座に返ってきた答えは

“人柄ですね。”

水谷さんは目は小さいが人を見る目は確かである。彼はこうも付け加えた。

“首藤先生が偉いのは、彼はいかにものんびりしているようだけど本当は凄い努力家なんですね。ただそういう素振りはいっさい見せない。”

首藤先生のセミナーを受けてみようという気になった。5、6年前までは積極的にあちこちのセミナーに参加したのだったが、どれも物にはならず、気づいてみると昔となんら変わらぬ自分流である。そんなわけで仕事のほうが忙しくなってきたことも手伝って、ここんところどのセミナーにも参加せずにやってきた。だからといって、自分のやっていることがマンネリ化していることには十分気付いていた。さらに言えば、以前は仕事の中にもいい意味の遊びがあり、それなりに楽しんでやっていた。今はどうも何か欠けているように思える。そんなもやもやしたものを抱えたまま、ハワイの首藤セミナーに参加した。

首藤先生のデモンストレーションを見ていて感心したのは、実に楽しそうに鍼をやることである。一見、子供が遊んでいるようにも見える。こちらまで楽しくなってくるから不思議だ。自分はこれだけ楽しんでいるか。本当に鍼が好きか。これってひょっとして一番大事なことじゃないのか。セミナーの度初っ端からショックを受けた。理屈ではないだけに問題は厄介だ。

実技も楽しませてもらったが、それに勝るとも劣らなかつたのが講義である。何とも言えない軽妙な語り口で、まるで落語を聞くような気分で聴講させてもらった。二日酔いと奥さんのことがよく話の中に出る。説得力があるので酒が飲めない鍼がうまくならないのかと思わせる。

以下、心に残った言葉をここに記しておきたい。

“一つのつばでも本当に使いこなせるようになるまでには一万回くらい使わないものにならない。”

以前、合気道をやっていた頃、先生に“一つの投げ技でも一万回くらい投げてみ

ないと分からない。”と言われたのを思い出す。同じ名前のつばを使うにしても、ひとそれぞれそのつばの表情が違う。正確なつばを探し当てたあとにはそれを効かすという問題が残る。深谷先生の“つばは効くのではなく、効かすものである。”という言葉もある。

“心がけ次第でのびる。”

これはたしか、野上先生のデモをみながら言われた言葉だと思う。野上先生は昔、技術的にはそれほどまくなかったが、ある時大失敗をしておきて、それ以来真剣に首藤先生のところへ通うようになり、飛躍的に進歩したと言う話だった。そのあとで“人は転機があればそれをきっかけにしてグンと伸びます。あとは心がけ次第でどんどん進歩します。”と結ばれた。これは私のように特別の師匠を持たない人間には大変心強い言葉だ。

心がけ次第と言うのは当たり前と言われればたしかにそうだが、それが晴天の霹靂のように聞こえたのは、やはりそれを実際にやってきた人の口から出る言葉の重みのせいなのだろう。

“いまでも自分の鍼の運用法がこれで正しいのかと疑問に思うことがある。”

また武道の話を引き合いに出すが、私の空手の先生のそのまた先生が大山倍達といふ不世出の天才と言われた人だが、この先生が晩年、自分の握りこぶしをみながら、その握り方でよいのか自問自答することがたびたびあったと言うエピソードを思い出した。いかに名人と呼ばれる人でも、もうこれでよいということはないらしい。学びは死ぬまで続くということか。ひょっとすると一生では足りず、またもう一生要するかも知れない。気の遠くなるような話だが、鍼と言う芸術はそれだけ奥が深いということでも楽しみでもある。

もっと色々あったはずだが思い出せない。この三つが一番心に残った。これらの言葉にしても先生は余談的に言われたものばかりだ。だいたい出来の悪い生徒の常として余談しか頭に残らないと言うのも困ったものである。

帰ってから改めて、小野文恵氏の“経絡治療—鍼灸臨床入門”を読んでいたら次の一文に出くわした。

“経絡治療は鍼灸治療の一派と見る人もいるかも知れないがそれは間違いで、流派でもなんでもない。古来よりの伝統を有する、伝統治療法というべきものである。”

経絡治療とはまさしく基礎の基礎であり、針灸師たるもの避けては通れないものなのだということがやっと分かった。それにはなんとしても気の運用ができないと話にならない。つまり、経絡の変動が分かること（東洋医学的診断が下せること）、そしてその変動を鍼や灸で調節できること、これに尽きる。今回のセミナーの一つ、“氣至る”の講義と実技はその意味で有り難かった。むろん、これですぐに“氣至る”の感覚が会得できるはずもないが、自分の目指すものが何かと言うのがおぼろげには見えた。願わくばこれを転機として、あとは心がけ次第で、先生の言われるように伸びるのではないかという希望が湧いてきた。

まことに恥ずかしい話だが、開業十八年目にしてまたスタートラインに立ち戻ったような塩梅である。ただ今度は、どちらに向いて走るのか、それがはっきりしているところが救いではある。気分は決して悪くない。

高松文三, D.O.M., L.Ac.

1982年、ニューメキシコ・サンタフェのKototama Instituteを卒業。1988年よりダラスにて開業、現在に至る。鍼灸に加え操体法、マクロバイオティクも指導する。現在、テキサス州・ダラス市にて開業する。

